

話し好きの日本に関心

悼む

P・サミュエルソン氏

「大恐慌を見た経済学者11人はどう生きたか」という表題の本を抱え、ボストンのマサチューセッツ工科大にポール・サミュエルソン氏の研究室を訪ねた。リーマン・ショック直後の昨年10月のことだった。

1929年からの世界大恐

慌の当時に学生だったサミュエルソン氏は、生き証人として語った。「思い切った財政支出で、経済危機も失業も克服できる。ルーズベルトのニューディールがそれを示した。軍拡に頼った悪い例がヒトラーだが」

衰えぬ頭脳の持ち主は、あ

くまでも平和的なやりかたで、財政赤字を恐れずに世界同時不況に臨むべきだと、力強い声で、いすから身を乗り出すように話し続けた。その姿を、きのうのこのように思い出す。

「この本では、あなたを近代経済学の父と呼んでいきます。あなたの主著『経済学』を大学生時代に教科書として学んだ私も、そう思います」と言ったところ、「継父かも」とほほえんだ。

初めて会ったのはニューヨーク特派員として米国の経済を取材していた89年。それ以降、インタビューするたびに、いつも笑顔で迎えてくれた。話し好きで、日本への関心が深い。

「日本の政治状況はどうなっている」と聞いたかと思えば、「日本の学者も経済界との接点を多くすべきだ」などと、アドバイスメも忘れない。「古き良きアメリカ人」を地でいくリベラル派だった。

「自分は中道主義者だ」。そう語るサミュエルソン氏に「ええ、あなたの著書や論文を読んだ人は、みなよく理解しています」というと、うれしそうにうなずいていたことも忘れられない。

市場メカニズムを尊重すると同時に、不況を克服し貧困をなくすため政府の役割を重視する。そういうバランスのとれた経済学の復権を、彼は確信して去ったに違いない。

(論説副主幹 小此木潔)